

小林勝作品集
3

小林勝作品集——第3卷

©1975

一九七五年一〇月二五日印刷 一九七五年一月五日発行

著者——小林勝

装本——駒井佑二

発行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社白川書院

東京出版部——東京都新宿区左門町三ノ四 電話三三三三—三三四四 一二六 振替東京一七六四五

本社——京都市左京区北白川追分町八七 電話五五—九一一三九〇 二六〇六 振替京都三三

0393—7557—3114

小林勝作品集

—
第3卷

編集委員

野間

長谷川

菅原

中野

四

重

克

野

宏

郎

己

治

第3卷——目次

初期詩篇

早稻田の銀杏の木に捧げる歌——7

夕暮れのうた——12

*

強制招待旅行——17

独居房ノート——201

戯曲

檻——219

*

逃亡者——317

解題 解説

藤井 菅原

徹 克己

353 341

初期詩篇

早稲田の銀杏の木に捧げる歌

私は早稲田を愛する

私は早稲田を愛する理由を

沢山持っている。

早稲田の構内にはえているもの

それは銀杏の木だ。

私は早稲田の銀杏が好きだ。

夜の銀杏が好きだ。

夜、夜の闇の中にも

銀杏はやっぱり黄色に見える。

窓からさし出すかたむいた光の中に

夜の銀杏はやっぱり黄色に見える。

私は朝七時半に家を出て職場へ行く。

真暗になって早稲田へ来る。

黄色い銀杏を見た時に

私はやっと落着いた気持ちになる。

黄色い銀杏は冬を告げている。

もうすぐ冬が来ると、私に云う。

夜の本枯しの吹きまくる

冷い教室の椅子が

お前を待つようになるぞと

そう銀杏は私に語りかける。

かつて

すさまじい風の吹く夜

私は腹の底からガクガク震えながら

疲労にたえかねて机の上に

仰向けにねていた。

その頃

朝はかつたるいフシマンに燃えながら

一番電車にのり

ミキサーも何もない

原始的な仕事場で

私は粉にまみれ

イーストをとかし

ニクロム線の真赤にシャク熱した

カマの側で

夢中になってパンをつくった。

パンをつくっても、つくっても

その金が何処へ行くか

私は知らない

不景気だ、つぶれそうだと云いながら

思い出した様に主人は

私に千円札一枚くれた。

私は机の上にねたまま

死んだように動かず

動けず

また動く気持もなかった。

ゴオゴオと風が吹き

銀杏の葉が飛びに飛んで

窓にあたった。

私のまわりに友人が三人。

ああ、黙っていてくれるということは、

何というすばらしい事であつたらう！

私は友等が何も云わないことで

その無言の温い心を感じとった。

先生が入ってきて

一目で私のすべてを読みとり

眼と眼を合わせた丈で読みとり

黙っていた。

黙ってコッコツと私の前を通り
教壇に登らずに

私の前の机に坐った。

私はようやく起きあがり

「先生、駄目になりそうです。」と云った。

こんな言葉に対して

ほんとの人間の感情の持主だけが
沈黙の愛撫でつつむ事が出来る。

先生はその時、やせた手で

たしかに私をしっかりと抱いていた。

先生は胃カイヨイであり

先生はひどいジであり

入院しなければならなかったのに

家庭を抱え

研究書をろくすっぽ買えず

まして

入院することなど夢にひとしく

しかし

こんなにおそくなつて

こんな寒さでジが痛むのに

ゴリキ―を手にして私をつつんでくれた。

先生のおちくぼんだ眼の中に、

熱い光とやさしい涙があった。

先生をじっと見ていながら

私は先生の一人の友を想っていた。

つきじの留置場で

三時間のゴーモンをうけ

血の大便をして死んだ若い作家

「カニ工船」を書いたタキジ

小林多喜二。

タキジの言葉がよみがえる。

「今年も十一月になった」

僕はこの月をこの上なく好む。

.....

この月は秋の次に

冬の来る月だ

秋はすぎ去ろうとしている

しかし秋はまだ過ぎ去ってはいはしない

冬が来ようとしている

しかし冬はまだ来てはいはしない

僕等は

このような烈しい転換期を好むのである。

やがて

つかれた体、つかれた心の上に

ゴリキーの言葉が

雨のように降りかかる。

雨にぬれて

風にふかれて

その夜は私の「秋の一夜」だった。

そしてこれらをひっくりくるため

そのすべてが「私の大学」だった。

「たかの歌」

「うみつばめの歌」

「秋の一夜」

私はそれらにゆすぶられ

目は悲しみとは別の涙にぬれ

新しい血は胸にあふれ

どうどうと遠くからおし寄せる

果てしもないつなみに

押され、押されて

夜の校内を歩いて行つた。

灯の消え残つた窓の側に

夜の銀杏が黄色く見えた。

その夜

早稲田の銀杏は何ものよりも

美しく見えた。

銀杏よ。

早稲田の銀杏よ。

私はお前を愛する。

お前は夜のコンクリの上になる

幾千の疲れた足音を知っている

その疲れた足が

つかれてはいても

丈夫で 健康で

太陽の輝く未来にむけて

歩んでいることも

知っている。

私達がそれを自ら信じているように
お前もまたそれを信じている。

風が吹いても

嵐になっても

幾千の足音がたとえ時に弱々しく

きこえようとも

お前はそれを信じてよい。

私の様な人間は、

私一人ではないのだから。

夕暮れのうた

小菅の夕暮れには歌がある。

みぞれが窓ガラスを

暗くぬらす日も

荒川の枯れはてた土手に

太陽の沈む日も。

メーデーの歌を

人民抗争歌を

カチューシャの歌を――。

一日、日のあたっていた房も

一日、日のあたらなかった房も

ひとしく、ひえびえとした夕闇に沈む頃。
小菅の夕暮れには歌がある。

ある者は

騒擾罪で

ある者は

強盗致死罪で

ある者は

公務執行妨害で

ある者は

公職選挙法違反で

ある者は

爆発物取締罰則違反で

ある者は

占領目的阻害処罰令違反で

おれたち

三百人に及ぼうとする

若者も

少年も

あるいは、年とった人々も

夕暮れの

窓の格子に顔をよせ

とらわれの一日に

誇りをもって

別れをつげるのだ。

音さまざまな小川が

広い大河に流れこむように

そして一層力強く

流れつづけるように

高い声も

低い声も

いく分、年老いた声も

やがて一つのうた

インタア・ナシヨナルに流れこむ。

高い声も

低い声も

いく分、年老いた声も

なわのように

ロープのように

ぎりぎりとからみつき

一つによりあわされて――。

灰色のコンクリートの塀を越え

夕もやの中に浮ぶ鉄橋を越え

さらに果しなくつづく

屋根また屋根を越え

インタア・ナシヨナルの流れてゆくところそこに

骨をきしませて

労働にあげ暮れした工場があり

またはドラムカンをこらした

砂利道があり、

烈しい討論にくれた家があり

ガリをきって血ばしった眼に
しらじらと朝をむかえた部屋があり
そして

おれたち、三百人が
やけつくような無念さの中に
手錠をたたきつけられた
その場所があり
その暗闇がある。

それらの場所の一つ一つを
ちぎりとられた

我が身のひとときのように想い、
今なお、そこで闘かう

あの人を想い

この人を想い

それらすべての

あつい心のしたたりをひめた

インタア・ナシヨナルは

この錆びついた窓から

もう幾度

夕べの空に流れていったことだろう。

一人一人の

苦しみと怒りの歴史をかくぐり

一人一人の

燃えあがる心臓のカナトロの上で

うちきたえられ

おれたちのうた

インタア・ナシヨナルは

ゆたかになる。

ああ、暮れゆく

東京都、葛飾区。

ここ小菅の

窓という窓をあけはなち

インタア・ナシヨナルをうたっている

三百人の声は

三百の心の重みをのせて

ひびいている。

ある者は

ヤマの兄弟を想い

ある者は

電気の兄弟を想い

その人々のストライキを想い

兄弟達のねばり強さのかげに

輝く、そのけなげな妻たちを想い

ある者は

曲りかけた腰で行商をつづけ

乏しい売上げで差入れにきた

「おつかさんよ！

その金で、せめて魚など食え」

そしてせめて

白髪しらががそれ以上ふえぬ事を祈り、

ある者は

ひそかに愛していた娘の

明るい笑いをおもい

その娘の胸にその声が

しみ渡ることを祈り

やがて、その

三百の心のすべてが

一つの想いをたどる。

たとえこのとらわれが

何ほどの永さでつづこうとも

その暗い道に

母からもらった微笑みを

早春の雪道に咲く

コブシの花のように

咲かせつづけようと

——夕暮れの

最後の光の中に

インタア・ナシヨナルをうたうのだ。

ああ、暮れてゆく

東京都、葛飾区。

ここ、小菅の

窓という窓をあけはなち

三百人のうたよ

おれたちのうたよ